



ジ イ ド

賈金つくり 法王庁の抜け穴  
地の糧

川口 篤・岡部正孝訳

世界文學大系

50

筑摩書房版

世界文学大系 50

---

ジ イ ド

---

昭和38年9月30日発行

定価 550 円

編 者 佐 藤 正 彰

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8  
振替東京 4123 電話 (291)局 7651

---

目次

賈金づくり

川口篤訳 5

法王庁の抜け穴

岡部正孝訳 193

地の糧

岡部正孝訳 327

モラリストとしての  
アンドレ・ジイド

R・M・アルベレス  
須藤哲生訳  
中山真彦訳 390

解説

佐藤正彰

403

年譜

413

裝  
幀  
庫  
田  
發

ジ  
イ  
ド



ロジエ・マルタン・デユ・ガールに

深き友情の印としてわが最初の小説を献ず

A・G

第一部 パリ

一

「そろそろ廊下に足音の聞こえるじぶんかな」と、ベルナールは思った。彼は、頭をあげて耳をそばだてた。いや、そんなはずはない。父と兄はまだ裁判所が退けないし、母は訪問、姉は音楽会、弟のカループは毎日中学が終わるとある私塾に稽古に寄ることになっている。ベルナール・プロフィタンディウーは、大学入学資格試験に備えてがんばらうと、家に残っていたのだ。試験まで、あと三週間。家の者は彼をそっ

として置いてくれたが、悪魔はそうはいかない。ベルナールは、上衣を脱いでいたが、息がつまりそうだった。通りに面した窓からは、温気が流れこむばかり。額はぐっしょり汗にぬれていた。その汗の一滴が、鼻を伝って流れ、手にした手紙の上に落ちた。

「まるで涙みたいだ」と、彼は思った。「だが、泣くよりは汗をかきほうがましだろうさ」

そうだ、日付が動かぬ証拠だ。疑いを容れる余地はない。たしかに、彼、ベルナールのことなのだ。手紙は母にあててある。十七年前の恋文、署名はない。

「この頭文字は、どういう意味だろう？ Vとも読めるが、もしかしたらNかも知れない……おふくろに訊いたものだろうか？……彼女の趣味のよさを信頼することでしょう。相手がプリンスだと想像しよう、こっちの勝手だ。いまさら下司の件とわかったところで始まらない！ おやじがだれだかわからなければ、おやじに似る心配もないわけだ。すべて、洗い立てたら、事が面倒になる。親子の縁から解放されたことにして、あとは忘れることにしよう。詮索は禁物。とにかく、きょうのところは、これでたくさんだ」

ベルナールは、手紙を畳んだ。それは、束ねてある他の十二通の手紙と同じ大きさだった。それらの手紙は、ばら色の細い絹のリボンで縛ってあった。リボンを解くにも及ばず手紙を引き抜いたので、元どおりリボンの帯の中に納め

た。そして、手紙の束を手文庫に入れ、手文庫を渦形の脚をした小卓の引出しにしまった。引出しは開いていたわけではない。彼は、上から秘密をあばいたのだった。ベルナールは、はずした小卓の板をきちんとはめこんだ。その上に縞瑪瑙の重い板を載せなければならぬ。彼は慎重な注意を払って、そっとその板をかぶせた。その上に、クリスタル・ガラスの燭台を二つ、それから、さつき面白半分修繕しておいた大型の置時計を載せた。

その時計が四時を打った。彼が時間を合わせなおいたのだ。

「予審判事どとその子息の弁護士どのは、六時まではご帰館あるまい。それまで、まだ間がある。判事どのが帰宅して、自分の事務机の上、おれの家出を知らせる置手紙を見つける、という段取りにしなければならぬ。しかし、手紙を書く前に、せひとも外の風に当たって頭をさっぱりさせたい。——それに、オリヴィエにも会って、一時にもせよ、ねぐらを決めておきたい。おいオリヴィエ、ほくにとってはきみの親切を試すとき、きみにとっては、ほくにきみの値打ちを見せるときが来たんだぜ。ほくたちの友情のりつばなところは、これまでお互いに相手を利用しなかつたことだ。しかし、しておもしろい用事なら、頼むに遠慮はいるまい。困るのは、オリヴィエが一人でいないかも知れぬことだ。まあ、いいさ！ わきへ呼び出すことだってできるだろう。平然たる態度であいつ



をびっくりさせてやろう。由来、おれは非常の際にいちばん自然に振舞えるんだから」

ベルナル・プロフィタンディウーがきょうまで暮らしてきたT……街は、リネクサンブール公園のすぐ近くにある。公園のメデイシスの噴水に近く、噴水を見おろす小径で、毎水曜日の四時から六時の間に、彼の友だちの幾人かが落ち合う習わしになっていた。そして、芸術、哲学、スポーツ、政治、文学について、語り合っていた。ベルナルは、ひどく急ぎ足に歩いて来た。しかし、公園の鉄門を通り抜けながら、オリヴィエ・モリニエの姿をみとめると、急に歩度をゆるめた。

その日の集りは、いつもより大勢だった。おそらく天気の良いせいだろう。ベルナルのまだ知らない者も、何人が加わっていた。これらの青年たちは、いずれも、人前に出ると、いっばしの人物気取りで、自然さをほとんど失っていた。

オリヴィエは、ベルナルが近づくのを見ると、顔を赤らめ、かなり唐突に、今まで話していた若い女のそばを離れて、遠のいた。ベルナルは、彼のもっとも親しい友だちだった。だからオリヴィエは、ベルナルの尻ばかり追っているように見られまいと細心の用心をして、ときには見て見ぬふりをするこゝさえあった。

オリヴィエのところへたどりつくまで、ベルナルは幾つものグループを越えなければならなかった。そして、彼もまた、オリヴィエのあ

とを追っているように見せまいとしていたのでまどった。

仲間のうちの四人は、ばやがね真眼鏡をかけた髯の濃い小男を取り巻いていた。その男は、他の者より目立って年上らしく、一冊の本を手に入っていた。それがデュルメールだった。

「きみはこれをどう思う？」彼は、四人のうちの特定の一人に向かって話していたが、皆から傾聴されているのがいかにもうれしそうだった。

「三十ページまで読んでみたが、色というものが一つもない、およそ色を示す言葉が一つもないんだ。ある女について語っているんだが、女の着物が赤いのか青いのか、それさえわからないんだ。ぼくには、色がなければ、何のことはない、何も見えはしない」——そして、自分の言葉があまり本気に受け取られていないように感じたので、いっそう誇張しようとして、くり返した。「絶対に何も見えはしない」

ベルナルはもう、この男の議論など聞いてはいなかった。彼は、あまり早くその場を去るのもどうかかと思いつながら、もう自分の背後で何やら言い争っている他のグループに耳を傾けていた。若い女と別れたオリヴィエも、この仲間に加わっていた。その中の一人は、ベンチに腰をかけて、『アクシオン・フランセーズ』(シャルル・モーラス、レオン・ドレーらが創刊した王党派の機関紙。第二次大戦の後、廃刊された(一九〇八—四四))を読んでいた。

この仲間に入ると、オリヴィエ・モリニエは何と分別くさく見えることだろう！ しかも、

歳からいったら、彼はいちばん若いほうの一人だ。まだ子供っぽいと言ってもいい顔つきにも、その眼差しにも、思想の早熟さがうかがわれる。彼は、すぐ顔を赤らめる。いたって気立てがやさしい。だれに対しても愛想よく振舞うのだが、何かしら打ちとけかねる遠慮、はにかみといったものが、友だちに対して垣を築いている。彼はそれを苦にしている。ベルナルがいなかったら、なおさら苦に病むことだろう。

モリニエも、今ベルナルがしているように、あちこちのグループにちよつとずつ顔を出していたのだ。ただお愛想からのことで、耳にすること一つとして彼の興味をひくものはなかった。彼は、新聞を読んでいる青年の肩越しにのぞきこんでいた。ベルナルは、振り向きもせずに、彼の言葉を聞いていた。

「新聞を読むなんて、どだい間違っている。のぼせるばかりだ」

すると、相手はキンキンした声でやり返した。「きみときたら、モーラス(シャルル・モーラス)の文筆家で、右翼の閣内閣。第二次大戦にドレーと協力した罪により、終身禁錮刑に処された」の話という顔色を変えるんだからな」

と、また別の青年が、からかうような調子で尋ねた。

「モーラスの論説が、きみにはおもしろいのかい？」

オリヴィエがそれに答えた。

「うんざりだ。でも、言っていることは正しいと思うよ」

すると、ベルナルルにはだれとも聞き分けかねる第四の男の声と言った。

「きみは、退屈しないようなものは、すべて深みがないと思つているのだから」

オリヴィエは、言い返した。

「そう言うきみは、ばかばかしくさえあれば、すべておもしろいと思つているんだらう！」

「ちよつと」と、ベルナルルはいきなりオリヴィエの腕をつかんで、小声で言った。そして、二、三步連れ出して、

「すぐ答えてくれ。急いでいるんだ。たしかきみの寢室は両親とは階が違ふと言つたね？」

「ぼくの部屋の戸口を見せたじゃないか。梯子はし階段の真向いで、家族の部屋に登る途中の中二階だ」

「弟もいっしょに寝てるつて言つたね」

「うん、ジョルジュだ」

「二人きりかい？」

「ああ」

「きみの弟、口は固いかい？」

「必要とあればね。なぜさ」

「じつは、ぼく、家を出たんだ。と言うよりも今夜出ようと思つているんだ。まだどこへ行くかはわからない。一晩だけ、きみのところへ泊めてもらえないかかね？」

オリヴィエは眞蒼まそうらになった。激しい感動に、ベルナルルの顔を見ることができなかった。

「いいよ」と彼は言った。「でも、十一時前はまだだ。毎晩ママが、『おやすみ』を言いに

降りて来て、ドアに鍵をかけて行くんだから」「とすると……」

オリヴィエは、にっこり笑つた。

「ぼくがもう一つ鍵を持つているんだ。ジョルジュが寝ていた場合、目をさまさないように、そつとノックしてくれたまえ」

「門番がだまって通してくれるかしら？」

「ぼくから話しておくよ。ぼくとは大の仲よしなんだ。もう一つの鍵も、やつからもらったのさ。じゃ、またあとで」

二人は、手も握らずに別れた。そして、ベルナルルが、これから書こうと思ふ手紙、父の判事が掃宅して発見するはずの例の置手紙のことを考えながら遠ざかつてゆく間に、ベルナルルといっしょにいるところばかり見られるのをきらつたオリヴィエは、皆から少し除け者にされた恰好のリュシアン・ベルカイエのほうへ歩み寄つた。オリヴィエは、ベルナルルというもつと好きな友だちがいなかつたら、リュシアンを大いに愛したかも知れない。ベルナルルがやり手であるに反し、リュシアンは気が小さかつた。どことなく弱々しく、心臓と頭だけで生きていくような感じだつた。自分から進み出ることはめつたにないが、オリヴィエが近づくのを見ると、うれしさにわくわくするのだ。リュシアンが詩を作つていることは、みんなうすうす感づいていたが、彼がその計画を打ち明けたのは、オリヴィエだけだらう。二人は、台地のはずれ

まで来た。

「ぼくが書きたいと思つているのは」とリュシアンが言つた。「ある人物の物語ではなく、ある場所の話なんだ。——たとえば、こんな公園の小径の話で、朝から晩までにそこで起こることを語りたいんだ。まず、子守の女中たちや、リボンをつけた乳母たちがやつて来る……。いや、いや……それより先に、男女の別も年齢も

わからない、灰色の人たちがやつて来て、小径を掃き、草に水をかけ、花を取り換え、要するに、公園の開門までに、舞台や背景を整えるわけだ。いいかい？ それから、乳母たちがやつて来る。子供たちは、砂のパテをこしらえたり、つかみ合いを始めたりする。子守女が平手打ちをくわせる。そのうち、初年級の学校が退ける。——それから、職業婦人たちがやつて来る。ベンチへやつて来て何か食べている乞食もいる。やがて、互いに求め合う人々。互いに避け合う人々。孤独を楽しんでいる思想家。そのうち、音楽が始まり店がしまふころになると、いっぱいの人だ。そして、ご覧のとおり、学生の群れだ。夕方になると、接吻をしている恋人たち、泣きながら別れてゆく者もある。最後に、日が暮れるころ、一組の年寄り夫婦……と、たちまち響く太鼓の音、閉門だ。一同退場。これでこの芝居は終わる。わかるかい？ 何かこう、いっさいの終り、死といつたものの印象を与えようという狙いだ……もちろん、死を表面に出しはしないが」

「うん、よくわかるよ」とオリヴィエは答えた

が、ベルナルルのことはかり考えていた彼は、まるで話を聞いていなかった。

「それに、まだ先があるんだ！」と、リュシアンは勢込んで続けた。「エピソードのような形で、夜になって人々がみんな帰ってしまい、人影一つない、そして昼間よりいっそう美しいこの同じ小径を描こうと思うんだ。深い静寂の中に、あらゆる自然の物音が、ひときわあざやかに聞こえてくる。噴水の響き、風にそよぐ木の葉のささやき、夜の鳥の歌。はじめ頃は、その中を、亡霊——石像のようなものでもいいんだが——そういったものを歩かせてみようと思っただ……しかし、それはどうも月並みらしい。きみはどう思う？」

「石像はいけね、そりやまずいよ」と、オリヴィエは上の空で反対した。が、相手のさびしそうな眼差しに気づくと、「しかし、うまくいったら、すばらしいものになるぜ」と、熱をこめて叫んだ。

## 二

ブッサンの書簡には、両親に対して当然抱くべき恩義の觀念など微塵もない。終始、両親の側を離れたことを悔む様子はない。みづから求めてローマに居を移すや、佛國の望みをまったく絶ち、あらゆる過去の思い出さえ失ったかに見える。

ポール・デュジャルダン(ブッサン)

プロファイタンディウー氏は、帰宅を急いでい

たので、サンリジエールマン大通りを遅れだつて歩いている同僚のモリニエ氏の歩き方が、まどろこしくてならなかった。アルベリック・プロファイタンディウーは、裁判所でとりわけ忙しい一日を過ごしたのだった。彼は、右の側腹に何か重苦しいものを感じて、それが気にかかっていた。疲れると、少々弱っている肝臓にさわるのだった。彼は、帰宅したら一風呂浴びようと考えていた。彼にとつて、風呂は一日の苦勞をいやす何よりの薬だった。それに備えて、きょうは間食もとらなかつた。たとい温浴でも、胃袋をからにしておかなければ不用意だと考えたからである。そんなことは、おそらく臆説に過ぎまい。しかし、臆説は文明の土台である。

オスカー・モリニエは、できるだけ足を早めて、プロファイタンディウーのあとを追うことに努めていた。しかし、プロファイタンディウーよりはるかに背が低く、脚も短かつた。それに、脂肪心臓の気味で、すぐ息切れがした。プロファイタンディウーは、五十五歳とはいえまだ豊饒たるもので、その引き締まった体軀、軽快な足取りをもつてすれば、モリニエを置き去りにしようと思えば、何の造作もいらなかつた。

しかし、彼は礼儀というのを非常に重んじていた。同僚のモリニエは、彼よりも年長だったが、経歴からいっても先輩だった。だから、当然敬意を払わなければならなかつた。のみならず、財産の点でも相済まなく思っていた。というのは、妻の両親の歿後、彼の財産は莫大な額

に上つていたが、それに引き換え、モリニエ氏は、全財産として、部長判事の俸給——それも、高い地位とは釣合ひのとれない、人をばかにしたような俸給以外に、何も持っていないかつた。もつとも、職務執行に当たつて示す威嚴のほどは、威嚴が凡庸な才能をつくらうつていただけに、たいしたものだった。プロファイタンディウーは、もどかしい気持を隠していた。モリニエのほうを振り返つては、汗をふきふきついてくる彼の姿を眺めていた。それはとにかく、モリニエの言うことには、大いに興味をひかれていた。しかし、二人の観点が違うので、議論はしだいに熱していった。

「その家を監視させることすな」と、モリニエは言った。「門番やスパイに入れてある女中の報告を集めるのも至極結構と思えますよ。ただ注意しなければならんのは、捜査の手をのびし過ぎたら、万事おじゃんになるということですよ……。と言う意味は、はじめきみが考えた以上に、とんでもないはめにひきずりこまれる危険があるというのです」

「そのような願慮は、公明な司法とは何の関係もないことです」

「さあ、そこですよ！ あなたにせよ、わたしにせよ、司法がどうあらねばならないか、現にどうあるかは、よく心得ているはずですよ。われわれは最善を尽くしている。そこはわかっています。しかし、いかに万全を尽くしたとしても、完璧を期するわけにはゆきませんよ。いまあな

たの扱つておられる事件などは、とくに微妙なものがあります。十五名の被告、と言つて悪ければ、あなたの一言であすにもそう呼ばれる者のうち、未成年者が九人もおります。しかも、それらの少年のうち、ご承知のように幾人かは歴とした名門の子弟です。したがつて、このさい逮捕状を出すなど、それだけで至極まずいやり方だと思つたのです。政党新聞は得たりとこの事件を取りあげ、あなたはあらゆる脅迫と中傷の的となります。そうなると、どんな手を打つても、どう用心したところで、幾人かの名前が明るみに出るとは、防ぐわけにいかない……わたしは、あなたに忠告する資格などありません。それどころか、かねがね高邁な識見、明晰公正な判断に敬服しているあなたからこそ忠告をいただきたいくらいですが……もしわたしがああなたの立場にあつたら、こうしますな。まず、主謀者を四、五人引つ捕えて、この悪わしいスキャンダルを根絶する手段を講じます……。さよう、やつらをつかまえることだけでも容易ならんことはわかつています。しかし、それがわれわれの商売じゃありませんか。乱痴氣騒ぎの舞台となつたアパートは閉鎖させます。そして、むちやな子供たちの両親には、ただ二度と不始末をしないように、穏やかに、こつそりと、警告を発する算段をします。相手の女たちは、豚箱へぶちこんだがいいでしょう。それはわたしも賛成です。女の幾人かは、手のつけられない墮落女のようにです。こんなやつらは、

どしどしたたきこんで、社会を浄化すべきですよ。しかし、重ねて申しますが、子供たちはつかまえてはいけません。おどかすだけにどめなさい。そして、『善悪の見境もなくやつた』といふことにして、しばらくは当人たちも、こわい目にあつただけで済んだことを意外に思うくらいにするのです。彼らのなかの三人は、まだ十四にもならんというじゃありませんか。両親にしてみれば、純真無垢な天使と思つているに違いありません。しかし、ここだけの話だが、あの年ごろで、われわれ、もう女のことなど考えたかしらん？」

彼は、歩いたためよりもその雄弁のために息を切らして、立ちどまつた。袖をつかまれているので、プロフィタンディウーも否応なく立ちどまつた。

「たとい考えたにしても」と、彼は続けた。「理想的に、神秘的に、言つてみれば宗教的に考えたに過ぎないでしょう。しかるに、当今の子供たちとよきなら、もう理想などというものは、持つておらん……。ときに、お宅のお子さんたちは、いかがですか？ むろん、いま申ししたこととは、お宅のお子さんたちのことではありませんよ。あなたの監督の下にあり、りつばな教育も授けられたことだから、こうしたあやまちを犯す恐れのないことはわかつていますがね」

じじつ、これまでプロフィタンディウーは、子供たちについて、不満の種は一つもなかつた。しかし、甘い夢を描いているわけではなかつた。

どんなにりつばな教育も、悪い本能には勝てないからだ。ありがたいことに、彼の子供たちはモリニエの子供たちにしてもおそろく同様だろうが、悪い本能を持たなかつた。だから、子供たちみずからが、悪い交友や有害な読書を選んでいた。思うに、防ぎえないことを禁じてみたところで、なんにならう？ 読んでではならんと言えば、子供は隠れて読む。彼のやり方はきわめて簡単だ。悪い本を読んではならぬと禁じたりはしなかつた。子供たちが、そういう本を読もうという気を起こさぬように仕向けるのだった。問題の事件については、なお熟考することにして、とにかく、モリニエにことわりなく何らかの処置に出るようなことはしないと約束した。ただ、慎重な監視を続けるつもりだった。悪事はすでに三月も続けられていることだから、なお数日ないし数週間続くことはまちがいあるまい。それに、休暇になれば、犯人たちはいやでもちりぢりになるだらう。では、さようなら。プロフィタンディウーは、やつと足を速めることができた。

帰宅するやいなや、彼は化粧室へ飛んで行つて、浴槽の栓をひねつた。アントワーヌは、主人の帰りを待ち受けていた。そして、ころあいはかつて、廊下で顔を合わせた。

この忠実な召使は、十五年来この家に仕え、子供たちの成人するのを見てきた。さまざまのことを目にし、その他多くのことに気づいていたが、家の人が彼に隠そうとしてゐることは、

いっさい見て見ぬふりをして過ごしてきた。ベルナルも、彼に対しては親しみの情をいさかずにはいられなかった。だから、彼に別れの言葉もかけずに家を出たくなかった。それに、おそらくは家人に対する腹立たしさから、肉親も知らぬ家出の件を、一介の召使に打ち明けることに快哉を覚えたのだろう。しかし、ベルナルのために弁ずれば、このとき、家人が一人も家にいなかったことを挙げなければならぬ。のみならず、ベルナルが別れの挨拶などしたら、かならずや家人が引きとめたに違いない。彼は押問答がいやだった。アントワヌにならただ、「出かけるぜ」と言えよよかった。しかし、そう言いながら、彼はひどく改まった態度で手を差し出したので、老僕は意外な面持ちで尋ねた。

「ベルナルさまは、夕食にはお戻りになりませんかですか」

「寝にも帰らないんだよ、アントワヌ」そして、相手が、この言葉をどう解すべきか、もっと詳しく聞きただすべきか迷っているの、ベルナルはいっそう意味ありげに、「出かけるぜ」とくり返した。それから、「手紙を置いてきた……」と付け加えたが、「パパの机の上に」と思いきって言うことができず、言い直した。

「事務室の机の上に。さようなら」

アントワヌの手を握りながら、同時に自分の過去にいとまを告げているかのように、彼は感動していた。そそくさともう一度「さよな

ら」をくり返し、のどもとへ込みあげてくる激しい鳴咽の爆発しないうちに、立ち去った。

アントワヌは、このようにしてベルナルを去らしたことは、自分の重大な責任ではあるまいかと考えた。——しかし、どうして自分に引きとめることができたろう？

ベルナルの家出が、一家にとって、思いもよらぬ驚くべき出来事であることは、アントワヌも気づいていた。しかし、非の打ちどころのない召使としての彼の役割からすれば、びくくりした様子など見せるべきではないのだ。主人のプロフィタンディウー氏さえ知らぬことを、彼が知っていたはならぬのだ。あっさり、「旦那さまは、ベルナルさまが家をお出になったことをご存じでしょうか？」と、言ってみて、いことはなかつたろう。しかし、そうなる、まるで自分の分が悪くなるし、身も蓋もない。彼があれほど主人の帰りを待ちわびたのは、さりげない丁寧な調子で、ベルナルから頼まれたことかかって用意した次の言葉を告げるためだった。

「ベルナルさまが、お出かけ前、旦那さまあてのお手紙を、事務室に置いていらっしやいました」しごく簡単に、まかり間違えは、注意をひかずにしまうかも知れない言葉だ。もっと重みのある言葉を探したが、同時に不自然に響かぬような表現は、見つからなかったのだ。それでも、これまでベルナルが家をあけるような

ことは絶えてなかったたので、アントワヌが横目で観察していると、プロフィタンディウー氏は思わずはっとせずにはいられなかった。

「なに！ 出かける前に……」

と言いかけたが、彼はすぐ、騒ぐ心を押ししずめた。目下の者の前で、驚きの色など見せてはならないのだ。彼は片時も優越感を忘れたことはなかった。きわめて落ち着いた、いかにも尊大な調子で、

「よろしい」と言った。

そして、事務室の前まで来ると、

「どこにあると言った、その手紙は？」

「旦那さまのお机の上でございます」

プロフィタンディウーが、部屋に入ると、なるほど、いつも書き物をするとき腰掛ける脇掛椅子のまん前に、目につくように置いてある一通の封書が目にとまった。しかし、アントワヌは、まだ彼を放免してはくれなかった。プロフィタンディウー氏が、手紙を二行と読まないうちに、ドアをノックする音が聞こえた。

「申しあげるのを忘れておりましたが、お客さまがお二人、小さいほうの客間でお待ちでございます」

「どういう人だ？」

「存じません」

「二人いっしょか？」

「そうではなさそうですございます」

「用向きは？」

「わかりません。旦那さまにお目にかかりたい

「それで」

「プロファイタンディウーは、もう我慢がならなくなつた。」

「これまで何度も言つてあるじゃないか。自宅でも客に邪魔されるのは迷惑だつて、——しかも、今じぶん。役所で面会の日も時間も決めてあるんだ……なぜ客を通した？」

「お二人とも、至急お話し上げたいことがあると申されますので」

「長いこと待つているのか？」

「かれこれ一時間にもなりましょうか」

「プロファイタンディウーは、部屋の中を五、六歩あるいて、額に片手を当てた。もう一方の手には、ベルナールの手紙を持っていた。アントワヌは、ドアの前に、悠揚せまらず、泰然と控えていた。とうとう彼は、主人の判事が日ごろの落着きを失い、生まれて初めて床を踏み鳴らしながら、次のようにどなるのを聞いて、愉快に思った。」

「ほつといてくれ！ ほつといてくれ!! お客には、いま忙しいから別の日に出直せと言え」

「アントワヌが出て行くか行かないかに、プロファイタンディウーはドアのところへ駆け寄つて、

「アントワヌ！ アントワヌ……それから、風呂の栓を閉めてくれ」

「風呂どこの話ではなかつた。彼は窓ぎわに近寄つて、手紙を読んだ。」

拜啓

きょうの午後、たまたまある発見をした結果、あなたを父と考えることをやめなければならぬことがわかりました。おかげでぼくは大いに気が楽になりました。あなたに対してまるで親身の愛情というものを感ぜなかつたぼくは、長いこと自分をひねくれた息子だと信じてきました。それよりはむしろ、ぼくがあなたの息子でないことがわかつたことのほうが仕合せです。

おそらくあなたは、ぼくが実子同様に扱われたことに對して、感謝すべきであるとお考えのことでしょう。しかし、まず第一に、ぼくは絶えず、あなたの子供たちとぼくにと對するあなたの心遣いの相違を感じてきました。次に、あなたのとられた処置が、醜聞を恐れるため、あなたにとつてあまり名誉にならない家庭的事情を隠すためであることは、あなたのひととなりを知っているぼくにはわかつています。——最後に、そうするよりほかに仕方がなかつたからです。お母さんには会わずに家を出ることにします。別れの挨拶などしたら、ぼくもついほろりとするかも知れないし、お母さんも、ぼくと面と向かつたら、居たたまれない思いがすることでしょう。——そんなことは、ぼくとしても不愉快だろうと思うからです。ぼくは、お母さんのぼくに對する愛情が、それほど深いものかどうか、疑問に思います。ぼくはたいいてい寄宿舎で過ごしたから、ぼくを知る暇はほとんどなかつたし、ぼくの顔を見れば、なることなら消し

去りたいと願っている生涯のある事実を絶えず思い出させることになるでしょうから、ぼくが家を出たところで、お母さんはほつとして、お喜びになることと思います。あなたにその勇氣がおありでしたら、お母さんにお伝え下さい。「ぼくは私生児に生まれたことについてお母さんを恨んではいない。それどころか、あなたの子供に生まれたことを知るよりは、そのほうがましだと思つている」と。(こんなことを申しで申しわけありません。あなたを侮辱するつもりで書いているわけではありません。しかし、こんなことを申せば、あなたはぼくを軽蔑なさるでしょう。そうすれば、あなたのお氣持も休まることでしょう。)

ぼくがあなたの家庭を出るにいたつたひそかな理由について、ぼくが沈黙を守ることをお望みでしたら、ぼくを連れ戻そうとなさらぬよう、お願いいたします。あなたのもとを離れようというぼくの決心は、くつがえすわけにはまいりません。これまで、ぼくの養育のために、どれほどの費用がかつたか、ぼくにはわかりません。知らなかつた間は、ご厄介になつて過ごせましたが、今後は、申すまでもなく、いっさいお世話にはなりたくありません。何によらず、あなたの世話になることは、堪えられません。もう一度あの生活をやり直すのでしたら、あなたの食卓につくよりも、餓死をえらぶだろうと思います。幸い、お母さんはあなたと結婚したとき、あなたよりお金持ちだったということ

聞いたように覚えています。だからぼくは、お母さんの負担で暮らしてきたと考えることもできるわけです。ぼくはお母さんに感謝して、ほかのことはすべて許してあげます。そして、ぼくのことを忘れて下さるようにお願いします。ぼくの家出を不審に思う人には、どうとでも説明はつくでしょう。ぼくを悪者にしてもかまいません。(もつとも、ぼくの許しを待たなくとも、そうなさることはわかりきっています)が、滑稽なあなたの名前(神を利用)で署名します。できればあなたに返上したい、そして、一刻も早く汚したい名前です。

ベルナル・プロフィタンディウー

二伸、持ち物はすべて家においてまいります。カループの役に立つことと思います。そのほうが正当な使い方です。あなたのために、そうであって欲しいと思います。

プロフィタンディウー氏は、よろめきながら脇掛椅子のところまでたどり着いた。彼はじっくり考えてみたかったであろう。しかし、さまざまな考えが頭の中でごたごたと渦巻いていたのみならず、右の脇腹、肋骨の下ところに、しくしくとした痛みを感じていた。簡単におさまりそうもない。肝臓の発作だった。ヴィンシー水(ミネラル)でも家にあつたら！せめて妻が帰っていたら助かるのだが！妻といえ、ベルナルの家出をどう告げたものだろうか？手

紙を見せるべきだろうか？あの手紙は不当だ。とんでもない不当な内容だ。まず腹を立ててしかるべき筋合いのものだ。この悲しい気持を、憤激の情と思いたいくらいだ。彼は深い吐息をもらした。息を吐くたびに、溜息のように力なく早口の「ああ！弱った！」という言葉がもれた。脇腹の痛みは、悲しみと一つになり、悲しみを証拠立て、悲しみのありかを示しているような気がした。つまり、肝臓が悲しんでいるような気持だ。彼は脇掛椅子に身を投げて、ベルナルの手紙を読み返した。そして、悲しげに肩をすくめた。たしかに、この手紙は彼にとつて残酷だった。しかし、彼は文面に、怨恨、挑戦、高慢の調子を感じた。これがほかの子供たち、つまり彼の妻子だったら、一人としてこうは書けなかったろうし、彼自身にしても同じことだったろう。彼にはそれがよくわかっていた。彼自身にそなわっていないような気質は、子供たちの中にも一つとして見いだされないからである。もちろん、彼はベルナルの一反変わった粗暴狎介(けんかい)な性質をたしなめなければならぬと、いつも思っていた。しかし、そうは思ってもだめだった。彼がほかの子供たちにまして、わけてもベルナルを愛したのは、まさにその点にあることを、よく知っていたからである。

しばらく前から、そばの部屋で、音楽会から帰ったセシルがピアノに向かい、船歌曲の同じ楽句を飽きもせずにくり返している音が聞こえ

ていた。アルベリック・プロフィタンディウーは、とうとう我慢がでなくなつた。客間のドアを細目に開け、うめくような、ほとんど哀願するような声で、——というのは、胆石がたまらなく痛み出したからである。(それに、セシルに対して彼はいつも多少とも遠慮がちだった。——こう言った。

「セシルや、家にヴィンシー水があるかどうか、見てきておくれでないか。もしなかったら、だれか買いにやっておくれ。それから、すまないが、ピアノをちよつとやめてくれないか」

「どこかお悪いの？」

「いや、いや。ただ、夕食まで少し考えごとがあるのね。おまえのピアノが耳にさわるのだよ」

そして、苦痛のために気が弱くなっている彼は、やさしく付け加えた。

「いま弾いていた曲は、なかなかきれいだね。何という曲？」

しかし彼は返事を待たずに出て行った。もつとも、娘のほうでも、父が音楽をまるで解せず、(少なくとも彼女の言うところによれば)『ヴィアン・プブルー』(「ねえさん、おいでよ」とタンホイザーの行進曲とをこつちやにすることを知っている)ので、返事をするつもりはなかった。だが、彼はまたドアをあけて尋ねた。

「お母さんはまだかい？」

「まだよ」

何たることだ。このぶんではだいたい遅くなり

そうだから、夕食前に話す暇はあるまい。ペルナールの不在を、さしあたりどうごまかしたらよからう？ といつて、まさか、ありのままを語り、子供たちに彼らの母親が犯したかりそめの過ちの秘密をあかさすわけにもいかなかった。ああ！ すべては、あれほど完全に許され、忘れられ、償われていたのに！ 末の子の誕生が、夫婦の間の和解を成立させたのだった。それなのに、突如として、このような復讐の亡霊が過去の中から浮かび上がり、このような死骸が波に運ばれてこようとは……

はて！ また、何事だろう？ 事務室のドアが音もなく開いた。急いで彼は、手紙を上衣の内ポケットに忍ばした。入口のカーテンが静かにかかげられる。カループだった。

「パパ、ねえ……このラテン語の文章は、どういう意味？ まるでわからないんだけど……」「ノックせずに入ってはいけないと言つてあるじゃないか。それに、何かにつけて、このように邪魔をしにきては困る。おまえは、自分で努力をせずに、人の助けを求め、他人に頼る癖がついてきた。きのうは幾何の問題だったが、きょうはきょうで……。そのラテン語というのは、だれの文章かね？」

カループは、ノートを差し出す。「だれとも教わらなかつたの。でも、ほら、読んでごらんさない。パパならわかるでしょう？ 先生が書き取らせただけど、ぼく、書き違えたかも知れない。これで正しいかどうかだけで

も見てくれない？」

プロファイタンディウー氏は、ノートをとりあげた。しかし、痛みはあまりにも激しかった。彼は、しずかにカループを押しやった。

「またあとにしよう。間もなく夕飯だから。シャルルは帰つたかい？」

「帰つたけど、また事務室へ降りて行きました」(弁護士<sup>1</sup>のシャルルは、一階の室で依頼人に会うことにしていた。)

「パパのところへ来るように言つてくれないか、いますぐ！」

呼鈴が鳴る！ やつとプロファイタンディウー夫人のご帰館だ。彼女は遅くなつた言い訳をいう。訪問がたくさんたまつていたので。夫の苦しそうな様子が心配だ。どうしてあげたらよからう？ たしかに、顔色もたいへん悪い。——夕食は食べられそうもない。みんな、わたし抜きでお食べ。しかし、食事がすんだら、子供たちを連れてきてくれないか。——ペルナールは？——ああ、そうそう、友だちが……それ、おまえも知っているだろう、いつもいっしょに数学の復習をやっている友だちがやつてきて、夕食を食べに連れていったよ。

プロファイタンディウー氏は、だんだん気分がよくなってきた。最初は、あまりの苦しさに、話もろくにできないことを恐れたのだつた。しかし、ペルナールの家出について何とか説明しなければならぬ。いま彼は、たといそれがいかにか苦しくとも、言わねばならぬことを承知して

いた。きつぱりと覚悟がついたような気がした。ただ一つ心配なのは、妻が泣いたりわめいたりして話の邪魔をしはしないか、卒倒でもしはしないかということだつた……。

一時間の後、彼女は三人の子供たちといっしょに入つてきて、彼のほうへ進み寄つた。彼は、自分の脇掛椅子のかたわらに彼女を掛けさせた。「気を落ち着けて聞いてもらいたい」彼は低いけれども重みのある調子で言った。「そして、一言も口をきいてはいけない。わたしの言うことを聞くのだ。そのあとで相談することにしよう」

そして、話の間じゅう、彼は妻の片手を両の手に握つていた。

「さあ、みんなもお掛け。試験でも受けるように目の前に立つていられては、落ち着いて話ができない。じつは、みんなにたいへん悲しいことを伝えなければならぬ。ペルナールが家出したのだ。もう会えないかも知れない……しばらくは。きょうはおまえたちにこれまで隠していたことを打ち明ければならない。隠していたというのも、おまえたちがペルナールをほんとの兄弟として愛してもらいたかつたからなんだよ。お母さんにしても、わたしにしても、ほんとの子供のように可愛がっていたのだからね。しかし、じつはあの子はわたしたちの子ではなかつたのだ……そして、あの子の伯父さん、というの、臨終にあの子をわたしたちに頼んで死んでいったあの子のほんとのお母さんの兄



弟が……きょうの夕方、あの子を引き取りに来たのだ」

「そこまで話すと、苦しい沈黙が続いた。カルーアの鼻をすする音が聞こえる。みんな、父親が先を続けるものと思つて待つてゐる。すると、彼は手を振つて言った。

「さあ、おまえたちはあつちへおいで。お母さんと話があるのだから」

子供たちが出て行つたあと、プロフィタンディウー氏は、長いこと黙つていた。彼の手に握られているプロフィタンディウー夫人の手は、死人の手のように冷たつた。もう一方の手で、彼女はハンケチを目にあてた。大テールに肘をつけて、顔をそむけて泣いている。全身を揺すぶるすすり泣きの間に、プロフィタンディウーは、妻のつぶやくこんな言葉を聞いた。

「ああ！ そんなむごいことを……ああ！ あなたがあの子を追ひ出したのですわ……」

「つい先ほど、ベルナルの手紙を妻には見せまいと決心したのだが、こんな言ひがかりをつけられて、彼は手紙を妻に突きつけた。

「さあ、これを読んでごらん」

「読めません」

「どうしても読まなくてはならんのだ」

彼はもう病氣のことなど忘れていた。手紙を始めからしまいで、行を追つて目であつた。さつき、話してゐる間は、あふれ出る涙を抑えるのに骨を折つたが、いまは感動さえ失つてゐた。彼はじつと妻を見つめる。何を考へてゐるの

のだらう？ 同じようなすすり泣きの合間に、同じような悲しい声で、彼女はなおもつぶやいてゐる。

「ああ！ なぜあの子にお話になつたのです……言つてはいけなひなことでしたのに」

「わたしはあの子に何も言つてはしないじゃないか……手紙をもつとよく読んでごらん」

「よく読みました……でも、そうしたら、どうしてあの子にわかつたのでしょうか？ だれがあの子に言つたのでしょうか？」

「なんだ！ そんなことを考へてゐるのか！ この悲しそうな調子は、そんなところから来ているのか！ このような不幸は、本来なら二人を結びつけるべきはずのものだ。悲しいかな、プロフィタンディウーは、二人の考へがまるで違つた方向に向かつてゐることをおぼろげながら感じていた。そして、彼女が愚痴をこぼし、責め、駄々こねるのを聞きながら、このひねくれた頭を、もつと敬虔な感情のほうへ向けようと試みた。

「これが罪の償いというものだ」と彼は言つた。頭から抑えつたたい本能的な欲望にかられて、彼は立ち上がった。いまは、肉体的苦痛など忘れて、いっこうに苦にならなくなり、すつくと立つてゐた。そして、敵意に、優しく、威厳をこめて、マルグリットの肩の上に手を置いた。

彼は、自分がこれまでいつも一時の過ちと考へようと思つてゐたことに対して、妻の後悔のしかたがきわめて不十分であつたことをよく知つ

ていた。彼はいま、この悲しみ、この試験が、

とりも直さず罪の償いに役立ちうるのだということと言つてやりたかつた。しかし、自分でも満足がいくともにも、妻にもわかつてもらえなうな言葉が、どうしても見つからなかつた。マルグリットの肩は、優しく抑える彼の手に抵抗を示してゐた。マルグリットのほうでは、夫がきまつて、人生の日常茶飯事から道德的教訓の

ようなものを引き出さずにはおかないのをよく知つていて、たまらなくいやなことに思つてゐた。彼は万事を自分のドグマによつて説明し翻訳するのだ。彼は妻のほうへ身をかがめる。こんなことが言ひたいのだ。

「やっばり、罪からは決して善いことは生まれないのだ。おまえの過ちを隠そうとしたことは何にもならなかつた。わたしは、あの子のためにできるだけのことをしてやつた。妻子同様に扱つてやつた。神様はいま、それが間違ひだつたことをお示しになつたのだ……」

しかし、言ひかけて、彼は口をつぐんでしまつた。

おそろく、彼女は、短いながらもこの意味深い言葉を理解したのに相違ない。それらの言葉は、彼女の心に食ひ入つたに相違ない。先ほどから泣きやんでゐた彼女が、前よりも激しくすすり泣きを始めたからである。そして、彼の前にひざまずこうとでもするようにな身をかがめるので、彼も彼女のほうに身をかがめて妻の体をささえた。泣きながら彼女は何を言つてゐるの